

祈り

読みかけの二冊の本のあいだで
ひとうち鐘の音が鳴った
誰のものでもない音だ
伸び縮みする らせんを描く
天窓を抜け 立ち昇る ならば響きよ
祈りを乗せてくれないか

狂宴の歓声 デモの怒号
夏の湿気が秘匿する 重みと煌めき
その傍らも音は過ぎていく にべもなく
掬い上げるのは
声の衣を剥いだあとに残る
やわらかな 透明な 氣息だけ
なおいつまでも 誰のものでもない音だ

もう銀河を貫いただろうか
遠く開かれたら また
隔たれてしまったような気がして
一度はかざした手を降ろす私は
なおいつまでも——でっかい鐘の内にいる
降りしきる静かさの光芒は
祈りの滲みた青へ 青へ